

2002

第 三 三 九 号



軍事運送部

受 審

第 四 三 三 六 〇 號

受 審 第 四 三 三 六 〇 號

廳 名

法 務 局

件 名

浮屠系刑罰法圖之事件

大 臣



次 官



高 級 副 官



主 計



裁 決



主 務 局 長



主 務 課 長



主 務 課 員

參 事 官



主 務 局 課 大 臣 房

號 卷 第 三 二 四 號
明 治 七 年 八 月 廿 七 日
明 治 年 月 日
明 治 年 八 月 廿 六 日
明 治 年 十 月 廿 七 日

聯 帶 局 長



聯 帶 課 長



審 案 筆 記 者



請議之案

^{陸海}軍治罪法中停虜降人ノ犯罪ヲ軍法會議ニ於
 テ審判スルノ規定アリトモ刑法中停虜ノ行
 為トレテ特ニ之ヲ審判スルノ規定ナシ故ニ停虜ヲ軍法
 會議ニ於テ審判スルハ其ノ刑法ノ罪ヲ犯シ又ハ
^{陸海}軍刑法中何人ヲ問ハス適用スヘキノ條項ニ觸レタル
 場合トモ然レド停虜ノ行為トレテ逃走又ハ友抗
 小力如キ殊ニ其ノ^{陸海}軍法會議ニ出ルモノノ如キ^{陸海}軍
 二有リ^{陸海}軍法會議ニ出ルモノノ如キ^{陸海}軍法會議ニ出ルモノノ如キ^{陸海}軍
 ルノ規定ナキハ缺點ト云ハサルヲ得ス是レ目下ノ狀
 態ニ於テ本令ノ發布ヲ必要トスル所以ナリ勅令

案ヲ添へて議ヲ請フ

年月日

海軍大臣

陸軍大臣

司法大臣

勅令案

海軍省 滿發第四四の五號

九月十日

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問

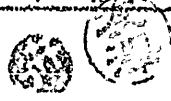
ヲ諮詢シ經テ^{帝國}憲法第八條ニ依リ停廢

ノ處罰ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ

公布セシム

御名 御璽

一頁 頁 頁



明治三十七年十月三日

陸軍省

各大臣

勅令第三百三號

第一條 停虜、監督者監視者又は護

送者に對し反抗若し暴行、或

為りし者ハ重禁獄ニ處シ其ノ情

輕キ者ハ六月以上五年以下、輕禁

錮ニ處ス

第二條 停虜、多衆共謀シテ逃走又ハ

前條ノ承為りし者ハ首魁ハ死刑ニ

處以具他者、有期禁錮重禁錮之處也。
其、情事ナキ者ハ小童禁錮ノ如ク逃走、日如罪屬カト為リ、者者

第三條 國際慣例ニ從フ
第三條 國際慣例ニ從フハ本國法律ニ違反スル者トシテ其ノ刑罰ニ係リテハ本國法律ニ從フルモノトスルコトヲ指ス
條、罪屬カト為リ宣旨、宣旨トシテ其ノ刑罰ニ係リテハ本國法律ニ從フルモノトスルコトヲ指ス者ハ重

禁錮ニ處シ、其ノ宣旨ニ有キ兵器
ヲ標リテ敵、其ノ宣旨ニ有キ兵器
ヲ殺シ、其ノ宣旨ニ有キ兵器

第四條
第四條 傷者ハ刑法第三編第一章ニ
傷者ハ、刑法第三編第一章ニ刑法第三編第一章

照量、照量ニ從フ處断ス

第六條 第一條乃至第三條ノ規定ハ再ヒ條屬カト為リ、又ハ前ニ條屬カケレドモ

犯シタル罪ニ之ヲ適用セス

法 庫 第 二

附
則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

聖 朝 旨

海軍司法兩大臣、御所議案

停廢、處罰に關する件制定、義二付

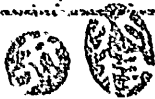
連署、リ以て閣議に提出、發度別紙

請議案相添及品議候也

(和合案共相添)

明治二十九年九月一日

九月一日



参考

2009

本案統制

本案ノ行ハル、地域ハ刑法及軍刑法ノ行ハル、地
 域ト均シカラスル、越ヨリ然ルニ刑法及軍刑法
 ハ帝國内ニ行ハル唯我臣民ニ對シテノ屬人
 的関係ヲ以テ其ノ到處ニ追隨スルニトスルハ疑未
 ノ解釋ナルヲ以テ本案ノ適用ハ全ク帝國内ニ限
 ル故ニ戰地又ハ占領地其他是等ノ地域ト帝國
 ト、中間地域ニ於ケル停層ノ行為ニ對シテハ必
 要ニ因リ適宜軍令ノ形式ヲ以テ相當ノ取締
 規定ヲ設ケル等、コトヲ為サハカラス是レ何等ノ不
 都合ナキニミナラス寧ろ實際ニ適スルニトス

以下、書状ハ
 甲日付カ者。
 乙日付カ者。

又外國、割腹中ニハ停虜ヲ或ハ程度ニテ自國
ノ軍人ト同視シテ罪責ヲ負ハシムルモ無キト非ズト
雖是レ本國ノ孫ラサハ或ハ我カ軍刑法ハ僅カニ
例外ナキニ非ズト雖專ニ特定ノ義務アル軍人ヲ至
少トシムルモノニシテ陸軍刑法ノ海軍人ト於テハ海
軍刑法ノ陸軍人ト於テハ尤ラ尚特殊ノ狀況
アル場合ヲ除ク外互ニ之ヲ常人視スルノ規定アル
ニ由リ實體法ニ於テハ規定點、如シキ年續法ニ於
テハ規定モ亦停虜ヲ自國ノ軍人ト同視シ其ノ
軍事上ノ階級如何ニ從ヒ軍裁判官ノ構成ヲ變
更スル等、例ナキニ非ズト雖既ニ實體法ニ於テ此

多義ヲ採ラズトシタリ以テハ年續法ニ於テモ亦之ヲ採
ラザルヲ可トスルモノナリ

浮屠ノ犯シ得ヘキ犯罪ヲ豫想セハ枚擧ニ違フ

ラズト雖亦案ノ慮カハ其ノ取締ト最モ有害

ニシテ却モ特ニ親是ニル其ナリハ或ハ四罰ニハコトヲ得

テ又縱令四罰ニハコトヲ得ルモ其ノ刑輕キニ過

カ如キモノト止マシ其ノ條ノ違犯ハ刑法ニ依リ又

其ノ輕微ナルモノハ特ニ設リヘキ懲罰令等ニ依ル

ト然ルハキ見込ナリ

以上ノ本案大體ニ就テハ說明ナリ以下各條ニ就

テ說明セリトス

憲 則 法

第一條

本條條意、文字ハ近世國際法ニ於テ一般ニ
 條意ト認メラハ、者ノ謂ヒニシテ別ニ説明ヲ
 要セス又互抗トハ抵抗干犯ノ意アルモノ、謂
 ヒニシテ行為ノ消極積極ハ固ヨリ別アルコト
 ナルモ總力ニ指教命令ニ背リモ抵抗干犯、
 意アルニシテ派スレテ疑順ヲ疑リニ止マル、類ハ
 意セザル、等ニ百ナリ拘レリ及抗、亦為中ニ軍
 艦ニシテ犯ス者他ト相共ニ犯ス者輕微、暴行
 ニ止マル者脅迫、其ノ他重劇、暴行ヲ為ス者
 等、其犯情ニ於テハ輕重ノモノアルハシ是レ其ノ刑

期ヲ一年以上五年以下ト定ムタル丞以也

第三條

俘虏單獨逃走ノ丞為ハ四罰令署ニ委シテ本
 案之ヲ四罰セズ多衆共謀逃走ノ丞為ヨリ之
 ヲ四罰スルマトシタルハ國際法ノ理論ニ疑ヒタルハ
 ナリ尚俘虏一旦逃走ノ目的ヲ達シタルトキハ
 再ヒ俘虏ト為ルモ其逃走ノ丞為ヲ罪トセズト
 シ國際法ニハ無論從テノ趣ニ付テモ特ニ其ノ
 明文ヲ掲グルヲ要セズトシタリ又多衆ノ文字ハ
 必ずしも何人トモト限定セズ刑法軍刑法等ノ
 同一文字ニ於ケルト同様解釋ニ委タルヲ可ト

註 宣 旨

之ハノ 趣旨ニテリ 特ニ 其ノ 刑ヲ 重劇ナラシメ
 タルハ 多象 結核ニテ 犯スル者ハ 其ノ 有罪
 ノ 程度 單獨ニテ 定ムルニテ 犯ス者ノ
 此ニアラズトシタルニ由ル

第三條

序ノ 宣批言ニ 背キテ 兵為ニシテ 特ニ 之ヲ 嚴罰
 スルノ 必要アルモノハ 通常 宣批言ニ 依リ 解散セラレ
 タル者ガ 同職 役中 面々 器ヲ 執ルノ 兵為ナリ
 然レトモ 此ノ 外ニモ 尚 嚴罰 受ルノ 必要アルモノナリ
 ラ 保セズ 例ハ 宣批言ニ 依リ 是ノ 地域ニ 制限的
 自由ヲ 與ヘラレタル者カ 宣批言ニ 背キ 其 地域

う逸出シテ有害行為ヲ為シタルトキ、如キ其ノ他
 宣批言ニ依リ緝放セラレタル非戦闘員力一兩敵軍
 ニ従軍シ之ヲ幫助シタルトキ、如シ是レ宣批言ニ
 背キ再ヒ兵器ヲ執リタルトアルタテ、五法例ニ依
 ルハ特ニ宣批言ニ背リ、亟為云々トシタルハ以テ也
 又本條及前條ニ於ケル刑總テ之ヲ死刑流刑禁
 獄輕禁錮等トシ死刑徒刑懲役重禁錮等
 トセリレテ取ル、モノハ犯罪ノ性質ナクハ九國奉祀
 系統ノモノニ屬スルモノト認メタルニ由ル

宣
 批
 言
 下

陸軍刑法

陸軍刑法

傍虜ノ逃走 其他有害行為ニ對シ如何ナ
ル糾罰ヲ加フヘキヤニ就テノ意見

第一案 逃走暴行殊ニ結託反抗ノ行為

約違反者ノ行為等ニ對シ禁錮以上死刑以下

ノ刑格ヲ定メ且傍虜ヲ陸軍治罪法ニ依リ

軍法會議ニ於テ審判スルトキ、其軍事上

ノ階級ニ由リ執事人ニ於テハト同様ノ待遇ヲ

為スコト、シテ緊急命令ヲ以テ之ヲ發布ス

我陸軍治罪法ニ傍虜ノ犯罪ハ軍法會議ニ於

テ審判スル旨ノ規定アリトモ陸軍刑法ニ傍虜ノ犯

二卷 陸軍刑法

傍虜ノ逃走 其他有害行為ニ對シ如何ナ
ル糾罰ヲ加フヘキヤニ就テノ意見

第一案 逃走暴行殊ニ結託反抗ノ行為

約違反者ノ行為等ニ對シ禁錮以上死刑以下

ノ刑格ヲ定メ且傍虜ヲ陸軍治罪法ニ依リ

軍法會議ニ於テ審判スルトキ、其軍事上

ノ階級ニ由リ執事人ニ於テハト同様ノ待遇ヲ

為スコト、シテ緊急命令ヲ以テ之ヲ發布ス

我陸軍治罪法ニ傍虜ノ犯罪ハ軍法會議ニ於

テ審判スル旨ノ規定アリトモ陸軍刑法ニ傍虜ノ犯

罪に關し、特ニ規定スル所無シ、故ニ我國法ノ下、浮屠ハ
 普通ノ外國人ト同様ノ刑原ト多ク、普通通外國人ニ
 シテ、犯罪者タル場合ニ非ハ、犯罪者タルトナリ、且、浮
 屠ニ在テ、其犯罪者タル場合ニ通常裁判所ニ
 裁判ヲ受ルモノナリ、軍法會議、裁判ヲ受リ、ルモノ
 數外國ノ例ニ否ラズ、即、浮屠ノ特ニ犯シ得ヘキ犯
 罪ハ、特ニ軍律中ニ豫想規定シタルナリ、
刑例、獨、伊、佛、等、刑、考、者
 是レ、五法ノ旨ニキリ得、キモノト云フヘシ、因テ、今、此、例、ニ
 啟ハシト欲セハ、之カ、為、特ニ法律ヲ設ケ、サハヘカラス、又
 陸軍治罪法ニ、浮屠ヲ軍法會議ニ於テ審判
 スルノ規定、レドモ、其審判法ハ、自分ニ由リ、特ニ過リ、
 其
 二

ニスルノ規是ナシ是亦多數ノ實例ニ及ス序者層ノ犯
罪ニ就テ特ニ規是セシト欲セハ併セテ規是スハキ
ヤリ

第三ノ案 序者層ニ適用スハキノ種ノ懲罰令

ヲ設テ其罰目トシテハ身分ノ如何ニ由リ輕
キハ輕重懲罰ノ如キヨリ重キハ數月以下
ノ輕重懲罰ヲ如キニ重キ迄ノモノヲ定メ刑
罰ト區別セシカ為之ニ相當ノ名稱ヲ附シ且
處分ノ手續罰權等ヲ規定シ惟莫テ勅
令ノ形式ヲ以テ之ヲ發表ス

多數ノ實例ハ前陳ノ如クナルニ序者層ノ違犯ヲ罰

法律 官 官

たる必スシテ法律ノ形式ヲ以テ之ヲ罰則ヲ是ルニト
 ラ要セズ即停虜ハ之ヲ權内ニ屬セシメテハ國ノ
 陸軍法律規則命令ニ服従スルハ海牙條約ノ
 明文ヨリ論スルニ停虜ヲ取締ル為ニ惟幕部令ヲ以
 テ其罰則ヲ設クル等ノコトヲ妨ケス但或立法例
 下ニテ縱令軍人タリト雖之ニ對シ死刑ハ勿論禁
 錮以上ノ刑罰ヲ科スル規定ノ如キニ命令ノ形式ニ依
 ラズ法律ノ形式ニ依リ之ヲ定ムルハ例ナリ以テ停虜
 ニ對シテモ同條禁錮以上ノ刑罰ヲ科スル規定ハ
 法律ヲ以テ之ヲ定ムルハカラス然レモ警告書トシテ
 禁錮トシテ法律ニ定ムルハ其ノ效果ヲ除クハ實行

此ハ大差ナシ是レ實際ニ於テハ略禁錮同様ノ事
ヲ執行スルノ目的ナルニ拘ハラズ若目ニ於テハ禁錮
等ノ為目ヲ避リヘシトスル取以也

以テ二案各一得一失アリト雖先ツ第三案ヲ可ト
セシ或ハ次ノ論アリレバウ數ヶ月ノ禁錮的科罰
ハ以テ不從順ナル者勞ヲ畏嚇スルニ足ラヌト或ハ然
ラレバナルトモ此者勞ニ走セシトスルトキ其他不從順
ノ行為アルトキハ之ニ對シ必要ナル酷烈手段ヲ施ス
エトシ得ルヲ以テ其ノ餘ハ數月ノ禁錮的科罰ニテ
モ不足ナルヘシ若シ又不足ナルトキハ數月ノ科罰
次リテ更ニ數月ノ科罰ヲ以テスヘシ其ノ他或ハ食

一處
實
監

科ヲ以テ之ニ相當ノ段ヲ科ス等適宜ノ方法ヲ設
 リテ得ヘシ且又平和克復ノ場合等ヲ慮ヘテ法
 律上ノ刑罰ヲ加ヘ置キタラシヨリハ寧リ罰令上ノ
 科罰ヲ加ヘ置キタラシヨリハ寧リ罰令上ノ
 不此ニ際中亂レテ決スヘキカ將メ他ニ方法アリヤ
 其ノ決定如何ニ因リ更ニ意見ヲ陳スヘシ

卷一

停屠ノ罪

獨ニ陸軍律

大正七年六月三日公布 十月一日ヲ實施

第五十八條

停屠ノ詔刑ニハキ行為ニ付テハ其罪等ニ

應シ此法律ノ規則ヲ適用ス

第五十九條

停屠ニシテ與ヘラレタル榮譽引當ノ盟約

ヲ破リテ逃走スル者又ハ榮譽引當ノ盟約ヲテシテ許

サレタル停屠ノ盟約ニシテ其盟約ニ對シテ與ヘラレタル許

諾ヲ破ル者ハ死刑ニ處ス

約束ニ依テ停屠タルモノヲ許シレタル者ニシテ戰争ノ

一 陸軍律

終ラリル前ニ其約束ニ背キタル行為ヲナス者ハ此刑
項ト同ノ刑ニ處ス

特殊刑軍律

改正案

第三五十四條

軍虜具護送、監視或ハ看守ノ任

アル軍人ニ對シ暴行或ハ脅迫ヲ加ヘタルトキハ二月

以上二年以下ノ特別禁獄ニ處ス

軍虜三人以上合同シテ其丞為リ行ヒタルトキハ二年

以上五年以下ノ禁獄ニ處ス

第三五十五條

軍虜五人以上通謀シテ左ノ丞為リ

行フトキハ死刑ニ處ス

一 過度ノ承為又ハ暴行ヲ為シ初次ノ勸諭ヲ

受ケルニ辭散鎮靜スルニテ拒ミタルコト

ニ 糧ニ至る器ヲ執ルコト

三 命令ヲ執行スルヲ拒ミタルコト

其中ニ有寵者又ハ煽動者或ハ首魁アルトキ

ハ唯之ノミニ死刑ヲ科シ其他ノ者ニハ其刑ヲ

免除ス

軍虜五人以上通謀シテ請願ヲ為シ又ハ異論

或ハ數語ヲ為シ頑然ト動カサハトキハ十五年次

上ノ特別懲獄ニ處ス

第三石ヲ十ニ條 軍虜ナル將校執言ニヒテ

一 處 軍 一 處

一 匪 軍 律
二 角七 兵器ヲ執リタルキハ死刑ニ處ス

俘去利軍律

旧法

第二百九十一條 對峙或ハ抗命ノ罪ヲ犯シタル

軍虜ハ死ニ處ス

此罪ノ犯人中ニ有官者或ハ正犯ハ煽動者

アルトキハ唯之ニ死刑ヲ適用スルノミ

其官等ハ軍虜交換條約書ニ依リテ之ヲ

是ニ

第二百九十二條 軍虜ナル將校執言ニ背キ再

ニ兵器ヲ執リタルトキハ同止ノ刑ニ處ス

佛蘭西陸軍律

第二百四條第二項

又 稱處言ヲ八食ニ一冉ニ其器ヲ執ル者ハ死ニ處

英國及白耳義

明文ナシ

廣 博 文 庫

俘虜ニ對スル罪

獨ニ軍律

身ハ百七十二年三月十日公布 十月一日ヨリ實施

第五八條

何人タリトモ 敵ヲ利シ又ハ獨ニ其若クハ

同盟兵ヲ害スルノ故意ヲ以テ 左ノ行為ヲナス者

ハ戰地謀殺(第五十七條)ナルニ依リ死刑ニ處ス

(十一) 敵ノ俘虜ヲ逃走セシムル者

輕キ場合ニ二十年ヲ降ラサハ懲役又ハ終身

懲役ニ處ス

(參考)

第六十五條 軍人戰地ニ於テ 左ニ獨リハ軍ヲナクシ者ハ逃セト同視ス
三 俘虜タルヲ殺シタル後ヲ直チニ降セシメ 甲峯ニシテ

一 處 二 處

浮太初軍律

改正集

第三百二十七條

軍人自己或他人、正當防衛

ノ場合又ハ對峙、抗命、奪略或ハ殲破ヲ仰

制シ若クハ逃走騷亂或ハ重大ノ災害ヲ生ス

ルキ害ヲ防止スルリ要スル場合ヲ除ク外如何

ナル理由アリト雖モ軍律ニ對シ暴行ヲ加ヘ

タルトキハ又月以上五年以下ノ特別禁獄ニ處

ス

其暴行ニ因テ第百二十七條第一項ノ殺傷

ニ致シタルトキハ第百二十七條乃至第百七十

條及第百七十三條乃至第百七十五條ニ定

ナタニ刑ヲ適用ス但シ有期刑ニ該ハトキハ其ニ
分、一以並ニ三命ヲ一以下ヲ加フ

其暴行ニ因テ疾病ヲ生セシマス又ハ平常ノ業
務ニ就クニ能ハサルニシテ又ハニ疾病或ハ平

常ノ業務ニ就クノ能力ハ十日ヲ出ラズレテ

ニ達スヘキトキハ二年以下ノ特別禁獄ニ處ス

第三百二十八條 軍人方法ノ如何ヲ問ハズ詭又

ハ兵為ヲ以テ軍人ノ自前ニ於テ其資格ニ

關シ之ヲ輕蔑シタルトキハ二年以下ノ特別禁獄

ニ處ス

第三百二十九條 軍人前ニ條ニ規クセル場合ニ

陸軍 第一

於る暴行又ハ輕蔑ニ因テ軍虜ヲシテ第三
百五十五條ノ兵為ラ行フニ至ラシメタルトキハ本刑ノ
三分ノ一ヲ加フ

第三百七十條 軍虜護送監視或ハ看守ノ任ヲ

ル軍人其所持ノ金錢或ハ物品ヲ取取シタル
トキハ三年以上七年以下ノ懲役ニ處ス

暴行又ハ脅迫ヲ以テ其兵為ラ行ヒタルトキハ
七年以上ノ懲役ニ處ス

第三百七十一條 軍虜ノ護送監視或ハ看守ノ任

アル軍人如何ナル方法ヲ以テタルヲ論セズ其逃
走ヲ得セシメ又ハ之ヲ容易ナラシメタルトキハ一年以

研 蘭 西 陸 軍 律

上五年以下ノ懲役ニ處ス
其懈怠又ハ疎虞ニ依リ逃走ヲ生シタルトキハ
二年以下ノ特別禁錮ニ處ス

第三百二十六條 軍人補給所出入ノ道逃ケルヲ知リ
或ハ容隠シ或ハ助成シ或ハ道ヘシテ或ハ隠匿
シ或ハ隠匿セシムル時ハ尋常刑法第二百三十
七條第二百三十八條第二百三十九條第二百四十條
第二百四十一條第二百四十二條第二百四十三條第
二百四十七條第二百四十八條ヲ適用ス

陸 軍 律

(参考)

一 附 録 第 一

第十七世 捕虜ヲ審判スルニハ軍法會議ノ編制ニ依
ルテ法國人ヲ審判スルニハ其犯人階級ノ相當ニ
依テ控ケ之ヲ定ム

英國陸軍刑法

光緒二十一年

第五條

軍律ノ支配ヲ受ケル各人戰事中心ニ在

ラ者、犯行アル者ハ軍法會議ノ審判ヲ受ケル

役又ハ本條例ニ於テ規程ニシテ輕キ刑ニ處ス

一 上官ノ命令ナクシテ捕虜又ハ馬匹ヲ安全ナクシ

レタル者又ハ負傷者ヲ後送スル、口實ヲ以

テ隊列ヲ離ルル者

第三十條

軍律ノ支配ヲ受ケル各人左ノ犯行ヲ

アハ若ハ軍法會議ノ審判ヲ以テ其故ラニ犯シ
タル者ハ懲役又ハ本條例ニ於テ規是シタル輕キ
刑ニ處シ其故ラニ犯シタルニ非サル者ハ林田綱又
ハ本條例ニ於テ規是シタル輕キ刑ニ處ス

ハ警言或係、巡察隊、炸彈隊、哨、哨、哨、哨、司
令ニ在ル者故ラニ又ハ故ラニ非スト雖モ正當

ノ權限ヲ有セシテ其或護ニ委セラレタル
凶者等ヲ殺セシムル者

ニ故ラニ又ハ正當ノ理由ナリシテ其或護ニ委セ
ラレタル凶者又ハ或護スヘキ職責アル凶者
ノ逃走ヲ許容スル者

一 陸 軍 官 制

白耳義

明文アリ

日本陸軍刑法

第百一十條

軍人敵ノ間諜ヲ誘導シ即或隱匿シ

若リハ敵ヲ利スル為メ停虜降人ヲ逃走セシ

メ及ヒ却奪スル者ハ死刑ニ處ス

第百一十一條

軍人停虜降人ヲ却奪シ若リハ暴

行脅迫ヲ以テ其逃走ヲ助リハ者ハ重禁錮

ニ處ス

第百一十二條

軍人停虜降人ヲ逃走セシムル者ハ

二年以上五年以下、輕禁錮之處に將校ハ劄官
ヲ附加ス

看守守護送者之ヲ犯ス時ハ重禁錮之處ス

第百十三條 軍人停居降人ヲ逃走セシムル為

ニ其器具他ノ器具ヲ給與シ若ハ逃走ノ方

法ヲ指示スル者ハ四月以上五年以下、輕禁錮

ニ處シ將校ハ劄官ヲ附加ス

看守守護送者之ヲ犯ス時ハ輕禁錮ニ處ス

第百十四條 軍人前二條ニ掲リル兵ノ輕罪ヲ

犯シシトシテ未ダ遂ケザル者ハ未ダ遂キ犯罪ノ例

ニ照シテ處断ス

陸軍省

第百十五條

軍人俘虜降人ヲ者守若クハ護

送ニ解急ニ因リ其逃走ヲ致ス者ハ十日以

上一月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百十六條

軍人逃走ノ俘虜降人タルヲ知テ

之ヲ藏匿シ若クハ隱匿セシムル者ハ一月以

上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ得候ハ制官ヲ

附加ス

但犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

参考

獨乙陸海軍裁判規則

第五十七條(草案第五十條) 被告人力常人等の場合に於
ては戰事裁判法第五十條第一号第五十一條

第一号(草案第四十七條第一号)の規定に準據し

て之を組織ス

常人力軍人ト共に許へられたる場合に於ては戰事裁判

法に準じ、軍人ト共に拘はりて之を組織ス

捕虜トナリたる將校ニ付ては、最終に於て其陸海軍

階級關係ヲ參照スヘシ

(一) 草案第五十一條ノ理由ニ云ハリ本條ノ意義ニ

陸軍部

於ける常人トハ草案ノ意義ニ於ける陸海軍
 人ト屬セザル各人ヲ謂フモノナリ隨テ捕虜モ
 亦此種ノ人ト屬スルモノトス戰時裁判兵ヲ稱
 成スルコ方リテハ最成ニヘテ捕虜トナリカシ將
 校ノ軍ノ等級關係ヲ顧慮スヘシ但施行法
 第三條(戰時及戰争訓令)ニ當リ捕虜及
 外國人ニ對シテ刑事裁判權ヲ行使スルコ
 關シ陸海軍裁判兵ノ構成ニ付テノ規定
 及裁判手續ハ勅令ヲ以テ之ヲ變更スルコ
 トヲ得(ニ於テ掲グル特別規定)ナラズ
 (二) 草案第十條第十三條(現行法第十五條第

中元條) 經申、一節ニ云ハリ又許退セラレハキ犯
 人カ擲殺、官等ヲ有タル捕虜ナルトキハ陸海
 軍刑法典第八十條 (擲殺^{皇内拘留ニ處セテ}中
禮臣居ヲ離レ或ハ新聞リ後ニ流リ)
 ニ對シテ輕罪ヲ生スルコトアリタトモ同法典第六十
 五十八條、依レハ捕虜ノ罰セラレハキ亦為テ
 實質上處断スルカ為メニハ此捕虜ノ軍
 務上、官等ノ規程トナルヘシトナルモ草案ニ
 在リハ捕虜ノ許認止、干係ニ於テハ常人
 ト同ノニ看做サレ但皇帝ヨリ格別ノ規
 程ヲ發セラレタルトキハ此限ニアラズ

(施行法第三條、又第五十條第三項參照)

陸軍省

(三)

藤士ワイフエロバツハ氏

(舊國陸軍省考案官司法課長)云
伯林大學公學教授

ハリ被告カ常人即チ法律ノ意義ニ於ケル軍人ニ

アラハトキハ(第五十條参照)戰時裁判兵ハ

被告カ下士等卒ヤル時ノ如ク稱成セラハ但捕

虜トナリタル將校ハ最成ニヘリ軍務上ノ階級

關係ヲ參酌スヘシ捕虜自自ハ捕虜トナ

リタル時ヲ以テ從來ノ軍律上ノ團隊ヨリ離レ

且是迄保存シ又其從屬セル國家ヨリ傳

承セル公法上ノ位置ヲ失フヲ以テ常人ナリト

雖モ及テ限リ將校ノ位置ヲ參照スルハ國

際法上ノ慣例ニ適合ス

佛國陸軍治罪法

第五十六條 若し詔を承けず、若し本卷第四篇に掲げられたる外、總て之を輕罪と犯す時、軍管內常設軍法會議に於て之を審判すべし

第一 ……

第二 ……

第三 ……

第四 ……

停廢を亦軍法會議に於て之を審判すべし

加ラゲエー、おデレー氏註解ニ曰リ停廢を亦平時軍

一葉 軍 旨

管内軍法會議ノ審判ヲ可キ者ハ其共和
 年五月十七日ノ決定ニ依リ信屬ノ外國人犯罪
 ヲ總テ軍法會議ニ付シ審判セシムヘシ但シ
 英器ヲ執テ殺害スル場合ハ此限ニ在ラズ其
 場合ニ於テハ軍法委員ニ付シテ処分セシムト然
 レトモ其後軍法委員ハ廢セシラズ信屬ノ
 犯罪ハ皆常設軍法會議ノ權限内ナル
 一三二

(軍法會議ニ於テハ捕虜ノ階級ニ從セ
 捕虜ヲ變ス(カキテ)而シテ其相當ノ階級
 ハ其後信屬ニ依リ是ハ加ラゲヌコトアレ

註解。伊本利軍律。九十九條第三項。ニ身明アリ。

獨乙

獨乙陸軍刑法第七條ハ外國ニ於ケル軍人ノ犯罪ハ内地ト同様ニ處断スルヲ以テ捕虜ニ在テモ亦同様ナリハ言フ侍々サハレシ又裁判管轄ニ付テハ陸海軍裁判規則第一條ニ於テ捕虜ハ陸海軍裁判權ニ服スルコトヲ明示シ内地ト野戰トヨリ捕虜ニ對スル軍法會議ノ權限ニ何等ノ差ヲキリ以テ捕虜

一應 軍 官

審判ニ付テハ内外同一ナリ

璽國陸軍刑法治罪法

璽國ニ於テハ陸軍刑法第三條ニ於テ補虜モ亦
現行法律ニ從テ處断スヘキコトヲ規定スルモ補虜
ノ犯罪益々如何ニ具本國ノ階級ヲ認ムルヤニ付明
文ナシ

補虜ノ裁判管轄ニ付テハ第一審裁判所ハ常
設ト否トヲ問ハズ孰レモ裁判權ヲ有ス即テ陸軍治
罪法第三條ニ於テ第一審ノ各裁判所ハ現行裁

判管轄、規定及び第八條乃至第十八條之從て裁
 判權、服之即、モ、と對て刑事裁判手續ヲ行
 フ職權ヲルコトヲ規定シ而シテ第十二條ニ於テハ特
 勤員ノ場合ニ於テハ軍具也、裁判兵ニ於テ軍
 人捕虜及人質ニ對て裁判權ヲルコトヲ明示
 セリ（第三十八條ニ於テハ軍司令官ノ職權上ヨリ
 同ノコトヲ規定セリ）

伊太利

伊太利ニ在テハ平時ノ軍法會議權限中ニ捕

憲
 官

虜ヲ掲ケス（陸軍治罪法第三十三條）而シテ戰
 時ニ於テ特ニ陸軍裁判兵ヲ設置スルトキ始メテ捕虜
 ヲ其權限中ニ列記セリ（第五百四十五條）然レトモ戰時
 ニ在テ設置スル裁判兵ハ國境外ニ出征シ若クハ臨
 戰地ノ軍或ハ團隊ニ設置スルモノナリ（第五百四十四條）
 然ラハ内地ニ在ル捕虜ハ何レノ裁判兵ニテ審判ス
 ルキカ

千八百九十九年海牙萬國平和會議議事錄第三編
第三十七、八頁

ローランの報告一節

既に述べたる如く第八條トナリタル「ブルツセル」案第二
牙八條ニ付テハ長時間論議セラレタリ殊ニ序層ノ
逃走ニ關シテ然リトス結局千八百七十四年「ブリエツ
セル」會議ニ於テハ如ク逃走ノ未遂ハ絶對ニ無
罪ニ付セリハモ敵前逃走ト同視シ死ニ處スルニト
テ殊ニ逃ケル為ニ刑罰ノ程度ヲ制限スルノ必要ナ
クナリテ認スルニ其結果トシテ「逃走」序層具

軍に違ふ前若りハ捕獲シタル軍、占領セル地
 地ヲ離ル、前ニ再ヒ捕ヘラレ、モ、懲戒上ノ罰ヲ
 受リヘシト決セリ然レトモ、舞論ノ進行中此制限
 ハ特別ナル事情別令ハ其謀及乱、變、暴集如
 キモノニ關聯スルトキハ之ヲ適用セリハストリ
 此等ノ場合ニ於テハ將官トボアヘレ、氏カ既
 年ハ五七五、年「アリエツセル」會議ニ於テ論
 シタル國ノ軍隊ニ行ハル、法律規則命令ニ服従
 スヘシトノ規定ニ依リ罰セラレ、而シテ此規定ハ
 猶旧第二十三條ニモ採用セラレ、且第八條ニ附加シ

タハ、不服疑ノ一切ノ行為ニ對シテハ必要ナル嚴重
ノ處置ヲ許容スレトシ、規定ニ依リ完全ニセラレ
ハシ

ブリュッセルノ草案第三十八條ハ殊ニ「逃走、停虜
ニ對シテ警告ノ後兵器ヲ使用スルコトヲ許ス」旨
ヲ規定セリ然レトモ分科委員會ハ之ヲ棄置スル
リ但シ陸軍ノ規則カ之ヲ規定スルコトハ停虜カニ
對シテ權利ヲ行フコトヲ拒ムルコトアリ只宣明
中ノ一條トシテ如此非常ノ處置ヲ殊ニ承認スル
ノ外觀ヲ有スルノ點カ必要ナルヲ認ムルハ之因
ルコト

一 陸 軍 官 署

然りて分科委員會ハ多少ノ躊躇、後亦條
 ノ承認ヲ進走リ仕遂ケタル後更ニ序章トナリ
 タルモノハ前、進走ニ付何等ノ罰ヲ受リルコトナリ
 ト、正文ヲ維持セリ分科委員ハ序章力其自
 由ヲ回復シタルトキハ事實止ニ於テモ法律止ニ
 於テモ其位置ハ一切、点ニ於テ皆リ序章ト
 ナラザリシ時有セシモノト同様ナリトハ説ヲ執リタ
 ルナリ故ニ前、事實、為キハ眞實ハ刑罰ヲ之
 ニ適用スルコトヲ得也

参照

海牙條約

陸戰ノ法規慣例ニ關シテ規則

第八條

俘虜ハ之ヲ權内ニ屬セシメタル國ノ陸

軍現行法律規則及命令ニ服従スルニ

總テ不遜順ノ行為アルトキハ俘虜ニ對シテ必

要ナル嚴重手段ヲ施スコトヲ得

逃走シタル俘虜方ニシテ其軍ニ違ハル前又ハ

之ヲ捕獲シタル軍、占領セル地方ヲ離ルルハ

前ニ函ヲ捕ヘシタル者ハ懲罰ニ付セラルルニ

俘虜逃走後遂ク之ニ後函ヲ俘虜ト為リ

タル者ハ前、逃走ニ對シテハ何等罰ヲ受ク

一處 頁一

2053

ル
エ
ト
ナ
レ

西

東

南

軍事課連帶

閱

中五六〇リ

受審

領

憲紳第四三〇号

廳名

法務局

件名

序長ノ委託ノ割ニ付

大臣

次官

高級副官

主務副官

主計

主務副官

主計

主務副官

決

参事官務專

主務副官

裁

法務

主務局長

主務課長

主務課員

主務課員

主務課員

主務課員

主務局

第二二四号

聯

主務局長

主務課長

主務課員

主務課員

主務課員

課長

明治廿九年九月廿五日

帶

主務局長

主務課長

主務課員

主務課員

主務課員

大臣官房

明治廿九年九月十五日

長

主務局長

主務課長

主務課員

主務課員

主務課員

2054

未結

法務局印

陸軍大臣ヨリ司法大臣へ照會案

陸軍部、處罰に關する緊急命令制定之件

第一四九号 御回答之旨趣に依り

正候間御異存無之候ハ、閣議に依り

出候度候條別紙ニ御捺平、且御懸付

有之度候也

(別紙請議書相添)

九月十日

司法大臣ヨリ捺平回答アリタリ也

海軍大臣へ照會案

皇太后及御親儀候條處罰に關する

丁世者海軍省員局員

上
御
奉
付

上

九月十日

案
定
之
件
議
決
上
御
奉
付

上
御
奉
付
御
奉
付
御
奉
付

2056

第多部令制定之件司法省意見、趣
 旨に概り修正致候に付御異存無之
 候に、閣議に提出致度候所別紙に
 御指示の上御趣付有之度候也

(同上)

達 滿發第 四四〇六 號

九月十七日



司法省 秘第一五五號

本月十七日 瑞波第四四〇六号
以下停書、次又四訓、戻スル緊急
勅令案閣議提本、件、付市照
會、趣願承在、法送付、案文
、于吳存書之候、付別紙請議
書、調印、口及送付也
明治三十七年九月十七日

司法大臣波多野教直



陸軍大臣寺内正毅殿

法務

一四九

九月十日付満洲地方四〇二九号ノテ以テ俘虜ノ者
 罰ニ關スル件ヲ審定シテ之ノ條ノ趣ヲ承知スル
 在ルニハ貴國刑法ノ徳則ノ適用アルヘキヲ以テ第四
 條ニテ之ヲ規定スルニ必キナラズシテ之ヲ規定ス
 ルニ方者ノ或ハ刑法ノ徳則ニ在ルニ適用アル者ナル
 ヤノ疑ニ生ズル虞ナシトシテ又第四條ノ刑係トシ
 一ニ此標ヨリテ之ヲ規定スルニ又第二條第三項ノ趣
 第ニ條中ニ規定スルハ毎當ナラズト思科トシテ之
 刑係トナシテ令ノ後末ニ規定スルニ行ハルニ當
 小此一ニハ規議トシテ之ヲ裁トシテ行ハルニ急
 捷ナルヲ願フ所ナリ
 右ノ如ク申上ル所ニテ



九月十日

明治二十七年九月九日

司法大臣陳多野敬



陸軍大臣兼内閣総理大臣

朱

官廳第三七五七號二

印

印

九月四日

送

此書知也之九等之信誠也
信書之要罰之罰之制定之裁
是為之等一之出檢案之信者
等之等之等之等之也

此書之九日了

此書之九日了

此書之九日了

2063